

日蓮大聖人御書全集

はやがちもんどう

早勝問答

新版
812
ゝ
826

はやがちもんどう

早勝問答

ぶんえい ねん
文永 8 年 ('71)

50 さい
歳

じようどしゆうもんどう

〔浄土宗問答〕

と ろくじ みようごう ぜんあく なか

問う。六字の名号は、善悪の中にはいずれぞや。

こた いちぎ い いまと ぜんあく

答う。一義に云わく、今問うところの善悪は、世・出の

なか

中にはいずれぞや。

いちぎ い い ぜんあく じじよう

一義に云わく、云うところの善悪を治定せば、墮獄は

じじよう

治定なるか。

いちぎ い みようごう あく じじよう だごく じじよう

一義に云わく、名号は悪なりと治定せば、墮獄は治定

なるか。

いちぎ

い

ねんぶつむけん

じじょう

うえ

ぜんあく

一義に云わく、念仏無間をば治定して、その上に善惡を

たず

尋ぬるか。

いちぎ

い

なんじ

えきよう

ごんじつ

なか

一義に云わく、汝が依経は、権実の中にはいずれぞや。

と

ねんぶつむけん

い

ほっけ

むけん

問う。念仏無間と云わば、法華も無間なり。

こた

いちぎ

い

ほっけむけん

じぎ

きようもん

答う。一義に云わく、法華無間とは自義なるか、経文な

るか。

いちぎ

い

ねんぶつむけん

じじょう

ほっけむけん

い

一義に云わく、念仏無間をば治定して法華無間と云う

か。

いちぎ い そし ほうぼう じじよう ほつけむけん
一義に云わく、祖師は謗法なりと治定して法華無間と

い
云うか。

いちぎ い なんじ い ほつけ ちようか ほつけ
一義に云わく、汝が云うところの法華は超過の法華か、

み だ じようぶつ ほつけ

また弥陀成仏の法華か。

と い ねんぶつむけん しょうこ にじゅうはつぽん なか
問うて云わく、念仏無間の証拠、二十八品の中にはいず

れぞや。

こた いちぎ い にじゅうはつぽん なか しょうこ あ だごく
答う。一義に云わく、二十八品の中に証拠有れば、墮獄は

じじよう

治定なるか。

いちぎ い ほつけ ひぼう しょうこ
一義に云わく、法華を誹謗するを証拠とするなり。

いちぎ い 一義に云わく、
ほつけ もん たず 法華の文を尋ぬるは、
しん と 信じて問うか、
しん 信

ぜずして問うか。

いちぎ い 一義に云わく、
ただ あびごく い 直ちに「阿鼻獄に入らん」の文を出だ
もん い

すなり。

いちぎ い 一義に云わく、
みようほうれんげきよう しょうこ 妙法蓮華経、その証拠なり。

いちぎ い 一義に云わく、
みだ ほんぜい そむ ゆえ 弥陀の本誓に背く故なり。

いちぎ い 一義に云わく、
みだ いのち た ゆえ 弥陀の命を断つ故なり。

いちぎ い 一義に云わく、
うえん しゃくそん そむ ゆえ 有縁の釈尊に背く故なり。
ねんぶつむけん 念仏無間は

さんぜしよぶつ はいりゆう

三世諸仏の配立なり。

と しかん ねんぶつ
問う。止観の念仏のこと。

こた いちぎ い ほうねん た ねんぶつ だごく
答う。一義に云わく、法然の立つるところの念仏は墮獄な

じじよう しかん と
りと治定して、止観を問うか。

いちぎ い さいほう ねんぶつ いち い
一義に云わく、西方の念仏と一なるか、異なるか。

いちぎ い しかん ねんぶつ ほっけ ひぼう
一義に云わく、止観の念仏は法華を誹謗するか。

いちぎ い かれ もんだん と
一義に云わく、彼に文段を問うべし。

いちぎ い しかん よ じょうどしゅう こんりゅう
一義に云わく、止観に依って浄土宗を建立するか。

と かんぎよう ほっけい ごと
問う。観經は法華已後のこと。

こた いちぎ い ゆえ ほっけ ぼう
答う。一義に云わく、この故に法華を謗するか。

いちぎ い 一義に云わく、
いぜん 已前ならば、
むけん 無間は治定なるか。

いちぎ い 一義に云わく、
なんじ 汝は謗法無間をば治定して問うか。
と

と 問う。
かんぎよう ほつけ どうじ 観經と法華と同時なり。

こた いちぎ い 答う。
どうじ 一義に云わく、
ゆえ ほつけ ぼう 同時なるが故に法華を謗ずるか。

かえ 返つて観經をも謗ずるなり。
と

と 問う。
せんし ほうぼう いちおう 先師の謗法は一往なり。
しほら じ お 字を置く故な

り。

こた いちぎ い 答う。
しほら ぼう 一義に云わく、「且く謗ぜよ」とは、
じぎ 自義なるか、

きようもん 經文なるか。

いちぎ い 一義に云わく、始終共に謗せば、墮獄は治定なるか。
しじゅうとも ぼう だごく じじよう

と みけんしんじつ おうじよう じようぶつ かた
問う。未顕真実は、往生にあらず成仏の方なり。

こた いちぎ い ゆえ ほっけ ぼう
答う。一義に云わく、この故に法華を謗ずるか。

いちぎ い よきよう むとくどう い ひと ひがごと
一義に云わく、余経は無得道と云う人は僻事か。

と ほっけほんじやく あみだ
問う。法華本迹の阿弥陀をば、いかん。

こた いちぎ い ほっけ みだ ほけきよう ぼう ちか
答う。一義に云わく、法華の弥陀は法華経を謗ぜんと誓い

たま
給いしか。

いちぎ い ほっけ みだ さんぶきよう おな い
一義に云わく、法華の弥陀と三部経と、同じきか、異な

るか。異ならば、無間は治定なるか。
い むけん じじよう

と ひと な むぶつ と な
問う。「二たび南無仏と称う」と。いかんぞ称名を無益

と云わんや。

こた いちぎ い
答う。一義に云わく、この故に法華を謗ずるか。

いちぎ い ほっけ しん と
一義に云わく、法華を信じて問うか、信ぜずして問う

か。

と ほっけ もろもろ によらい しよぶつ くぎよう
問う。法華に「諸の如来において」「諸仏を恭敬す」と。

なん みだ す
何ぞ弥陀を捨つるや。

こた いちぎ い ゆえ ほっけ ぼう たいし かみ
答う。一義に云わく、この故に法華を謗ずるかへ大旨、上

のごとし。

と よ じんぼう なか じきようり き
問う。「余の深法の中において示教利喜すべし」と。何ぞ

よきよう ぼう
余経を謗するや。

こた いちぎ い ゆえ ほつけ ぼう
答う。一義に云わく、この故に法華を謗するか。

いちぎ い なんじ ひぼう じじよう と じぎ
一義に云わく、汝が誹謗は治定して問うか。また自義

きようもん
なるか、経文なるか〈大旨、上のごとし〉。

と ふもんぼん かんぜおん しょうみようくどく あ み なん
問う。普門品に觀世音の称名功德を挙ぐと見えたり。何

よ ぶつぼさつ す
ぞ余の仏菩薩を捨てんや。

こた いちぎ い ゆえ ほつけ ぼう
答う。一義に云わく、この故に法華を謗するか。

いちぎ い かのん ほつけ ぼう
一義に云わく、この觀音は法華を謗するか。

いちぎ い ほん よ ねんぶつ た
一義に云わく、この品に依つて念仏を立つるか。

わたくし い かれ きようもん しやくぎ ひ とき もんだん
私に云わく、彼、經文・釈義を引かん時は、まず文段

いちいちと だいだんばんじ と ひぼう ことば さき
を一々問うべし。大段万事の問いには誹謗の言を先とすべ
きなり。 前さきの当家の義云々。

ぜんしゆうもんどう
〔禪宗問答〕

と ぜんてんま ゆえ
問う。 禪天魔の故、いかん。

こた いちぎ い ぶつきよう よ ゆえ
答う。 一義に云わく、仏經に依らざるが故なり。

いちぎ い いちだいしようぎよう ひぼう ゆえ
一義に云わく、一代聖教を誹謗する故なり。

問う。と ぜん 禅とは、三世諸仏成道の始めは坐禅し給えり、い

かん。

答う。こた いちぎ い 一義に云わく、汝が坐禅は仏の出世に背かば、

てんま じじよう

天魔は治定なるか。また坐禅は大小の中にはいずれぞや。

一義に云わく、いちぎ い 仏の端座六年もて法華無益と云うか。ほとけ たんざろくねん ほつけむやく い

問う。と ぜんぼう 禅法には仏説無益なり。ぶっせつむやく

答う。こた いちぎ い 一義に云わく、これ自義なるか、じぎ きようもん 経文なるか。

一義に云わく、いちぎ い やがてこれが天魔の所為なり。てんま しよい

問う。と きようもん 経文には「この法は示すべからず」と、いかん。ほう しめ

こた いちぎ い もん ほつけむやく い もん
答う。一義に云わく、この文は法華無益と云う文なるか。

いちぎ い ほつけ よ
一義に云わく、しかれば法華に依るか。

いちぎ い もんだん せ
一義に云わく、文段をもつて責むべきなり。

と りゆうによ ざぜん じようぶつ

問う。竜女は坐禅の成仏なり。その故は、経文に「深

ぜんじよう い しょう りようだつ

く禅定に入つて、諸法を了達す」と説き給えり。知んぬ、

ほつけむやく

法華無益ということ。

こた いちぎ い ぎ じぎ きようもん

答う。一義に云わく、この義は自義なるか、経文なるか。

いちぎ い ほつけ じようぶつ てんま じじよう

一義に云わく、もし法華の成仏ならば、天魔は治定な

るか。

いちぎ い もんじゆかいちゆう きようけ みようほう ろんぜつ
一義に云わく、文殊海中の教化は「妙法を論説す」

の
と宣べたり、いかん。

と つね ぎぜん この ふか ぜんじよう い つね ぎぜん
問う。「常に坐禅を好む」「深く禅定に入る」「常に坐禅を

たつと
貴ぶ」ととも説けり、いかん。

こた いちぎ い もんだん せ
答う。一義に云わく、文段をもつて責むべきなり。

いちぎ い もん ほつけむやく い もん
一義に云わく、この文は法華無益と云う文なるか。

いちぎ い もん ぜんしゆう こんりゆう
一義に云わく、この文をもつて禅宗を建立するか。

と ひと みずか みようりよう よにん み
問う。「ただ独り自ら明了にして、余人の見ざるところ

い ゆえ ぜんしゆう しんしゆう み よにん み
ろならん」と云う故に、禅宗ひとり真性を見て余人は見ず

と云^いうなり。

答^{こた}う。^{いちぎ}一義に云わく、^い文段をもつて^{もんだん}責^せむべし。^{きようもん}経文を見^み

るべし。

問^とう。^{ぞうほうけつぎきよう}像法決疑經に云わく「二字も説かず」^{いちじ}と。^としかれ

ば、^{いちだい}一代は「いまだ眞実を顯さず」^{しんじつ}と聞^きこえたり。^{しんじつ}眞実は

ただ迦葉一人、^{かしよういちにん}教外に別伝し給^{きようげ}えり、^{べつでん}いかん。^{たま}

答^{こた}う。^{もん}この文は仏説なるか。^{ぶつせつ}もし仏説ならば、^{なんじ}汝この文^{もん}

に依^よるが故に自語相違なり。^{ゆえ}

一義^{いちぎ}に云わく、^い言^いうところの迦葉は、^{かしよう}いかなる經にて^{きよう}

じようぶつ

成仏するや。

いちぎ

い

一義に云わく、

い

言うところの経文は、

きようもん

さんせつ

なか

三説の中にはい

ずれぞや。

いちぎ

い

一義に云わく、

りようがきよう

ぶつせつ

楞伽経は仏説なるか。

と

さんだいぶ

かんじん

あ

なん

ぜんでんま

い

問う。

三大部に観心これ有り。

何ぞ禅天魔と云うや。

こた

いちぎ

い

なんじ

さんだいぶ

しゅう

た

答う。

一義に云わく、

汝は三大部にて宗を立つるか。

いちぎ

い

さんだいぶ

かんじん

なんじ

ぜん

おな

一義に云わく、

三大部の観心は汝が禅と同じきか。

いちぎ

い

なんじ

てんだい

し

一義に云わく、

汝は天台を師とするか。

いちぎ

い

さんだいぶ

かんじん

しよきよう

す

一義に云わく、

三大部の観心は諸経を捨つるか。

問う。と そうひ ぜん 双非の禅のこと、いかん。

答う。こた いちぎ い いちど ほっけ よ いちど ほっけむやく 一義に云わく、一度は法華に依り、一度は法華無益

なり。

一義に云わく、二義共に天魔なり。いちぎ い にぎとも てんま

一義に云わく、この義に背かん者は僻事なるか。いちぎ い ぎ そむ もの ひがごと

問う。と ほっけしゅう みようほう どうり し 法華宗は妙法の道理を知るや。

答う。こた いちぎ い なんじ てんま じじょう と 一義に云わく、汝は天魔を治定して問うか。

一義に云わく、汝は法華を信じて問うか。いちぎ い なんじ ほっけ しん と

一義に云わく、妙法を知つて問うか、知らずして問う。いちぎ い みようほう し と し と

か。

いちぎ

い

なんじ

と

みようほう

こんきよう

一義に云わく、汝が問うところの妙法は、今經につ

ひやくにじゅう

みようあ

ほんぼん

と

いて百二十の妙有り。その品々を問うか。

いちぎ

い

なんじ

みようほう

よ

ぜん

こんりゆう

一義に云わく、汝はこの妙法に依つて禅を建立する

か。

てんだいしゅうもんどう

〔天台宗問答〕

と

てんだいしゅう

むけん

しょうこ

問う。天台宗を無間という証拠、いかん。

こた

いちぎ

い

ほっけ

ひぼう

ゆえ

答う。一義に云わく、法華を誹謗する故なり。

いちぎ い きようもん そむ ゆえ
一義に云わく、経文に背く故なり。

と よきようむやく い そ はん いちおう こころ
問う。余経無益と云うことは、麤を判ずる一往の意なり。

さいおう ひ しよじよう いちぶつじよう かいえ なん いちおう しゅう
再往の日は、諸乗は一仏乗なりと開会す。何ぞ一往を執

さいおう ぎ す
して再往の義を捨つるや。

こた いちぎ い いまい かいえ
答う。一義に云わく、今言うところの開会とは、いずれ

きよう かいえ
の教の開会ぞや。

いちぎ い こんきよう ほんじやく じゅうみよう しも
一義に云わく、今経において本迹の十妙の下に、

おのおのにじゅう かいえ きようぎようにんり しいちかいえ なか
各二十の開会あり。また教行人理の四一開会の中には

いずれぞや。

いちぎ い のうかい しょかい なか
一義に云わく、能開・所開の中にはいずれぞや。

いちぎ い かいえ のち ぜんあく な い
一義に云わく、開会の後、善惡無しと云うか。

いちぎ い てんだいしゅう ほつけ しん
一義に云わく、天台宗は法華を信ずるか。

いちぎ い かいえ のち しょしゅう えら い
一義に云わく、開会の後は諸宗を簡ばずと云わば、

てんだいだいし ひがごと
天台大師は僻事なるか。その故は南三北七云々、伝教大師

ろくしゅううんぬん
は六宗云々。

いちぎ い てんだいしゅう あくぎよう いた しょうあく
一義に云わく、天台宗は悪行をも致すべきか。性惡

ふだん い ゆえ じごそうい せ
不断と云うが故に自語相違なりと責むべきなり。

いちぎ い かいえ のち ごんじつ た ひと ひがごと
一義に云わく、開会の後に権実を立つる人は僻事なる

か。しかれば、薬王の十喩、法師の三説超過云々。

いちぎ

い

ゆえ

かいえ

こころ

じかく

一義に云わく、この故に、開会の心をもつて慈覚は

ほつけ

ぼう

法華を謗ずるか。

いちぎ

い

なんじ

じかく

でし

ほうぼう

一義に云わく、汝は慈覚の弟子なるか。しかれば謗法

じじよう

は治定なるか。

と

ぜんあくふに

じゃしよういちによ

ゆえ

ぜんあく

い

問う。善悪不二・邪正一如の故に、あながちに善悪を云

がんに

じゆう

うべからざるなり。元意の重これなり。

こた

い

てんだい

しゆつせ

あく

や

あく

答えて云わく、天台の出世は悪を息めんがためか、また悪

ま

を増さんがためか。

いちぎ い あくじ いた ほけきようにじゅうはつぽん なか
一義に云わく、悪事を致せとは、法華經二十八品の中に

はいずれの処に見えたるや。
ところ み

と ぜつだいみよう
問う。絶待妙のこと。

こた いちぎ い もんだん と
答う。一義に云わく、まず文段を問うべし。

いちぎ い きよう ぜつだい
一義に云わく、いずれの教の絶待ぞや。

いちぎ い ゆえ じかく ほつけ ぼう
一義に云わく、この故に慈覚は法華を謗ずるか。

と そうだい いちおう ぜつだい さいおう み
問う。相待は一往、絶待は再往と見えたり、いかん。

こた じぎ きようもん
答う。自義なるか、経文なるか。

いちぎ い そうだいみよう いちおう にじゅうはつぽん なか
一義に云わく、相待妙は一往というのは、二十八品の中

にはいずれに見えたるや。み

一義に云わく、相待妙は法華に明かすか、余経に明か

すか。もし法華に明かさば、法華は一往なるか。

問う。約教・約部の故に、約部の日は一往爾前の円を嫌

うなり。

答う。一義に云わく、言うところの約教は、天台の判釈

の四種の約教の中にはいずれぞや。

一義に云わく、約部は落居の釈なるか。

一義に云わく、約部を捨つべきか。

いちぎ い やつきよう とき にぜん えん きら だごく
一義に云わく、約教の時、爾前の円を嫌わば、墮獄は

じじよう
治定なるか。

いちぎ い やつきよう へん こんじやく えんおな
一義に云わく、約教の辺にて今昔の円同じとは、

ほけきようにじゆうはつぽん なか
法華經二十八品の中にはいずれぞや。

いちぎ い げんもん だいいち せ かい はい さんじゆう ゆえ
一義に云わく、玄文の第一の施・開・廃の三重の故に

かいえ のち よきよう す もん し し
開会の後も余經を捨つという文をば、知るか、知らざるか。

さんもんりゆう しんごんしゆうもんどう
〔山門流の真言宗問答〕

と ほつけだいいち けんきよう もん しんごん たい
問う。法華第一というは顕教の門なり。真言に対すれば

だいいち

第一とは云うべからず。

こた

じぎ

きようもん

じかくだいし

答う。自義なるか、經文なるか。ここをもつて、慈覺大師

むけん

もう

を無間と申すなり。

いちぎ

い

しんごん

たい

ほつけだいいち

ぼうこく

一義に云わく、真言に対して法華第一ならば、亡国は

じじよう

治定なるか。

いちぎ

い

しんごん

いこんとう

なか

一義に云わく、真言は已今当の中にはいずれぞや。も

ほか

い

いつきいちえん

いちおう

ひみつ

い

し外と云わば、一機一縁の一往にして、秘密とは云わるべ

からざるなり。

と

ほつけ

しんごん

りどうじしやう

ゆえ

しんごん

たい

問う。法華と真言とは理同事勝の故に、真言に対すれば

けろん ほう い
戲論の法と云うか。

こた いちぎ い なんじ むけんじじょう
答う。一義に云わく、さてこそ汝は無間治定なれ。

いちぎ い じかく しんごん ぼう
一義に云わく、さては慈覚は真言をも謗するなり。そ
ゆえ りどう ほっけ ぼう ゆえ
の故は理同の法華を謗するが故なり。

と でんぎよう ほんりたいこうしゅう もん けんみつ おな い
問う。伝教の本理大綱集の文をもつて顕密は同じと云

うこと。

こた いちぎ い しょ でんぎよう おんさく
答う。一義に云わく、この書は伝教の御作にあらざるな

り。

いちぎ い しょ よ ほっけ じかく ぼう
一義に云わく、この書に依つて法華を慈覚は謗するか。

とうじりゆう もんどう

〔東寺流の問答〕

と しんごん しやくそん せつ い しょうこ

問う。真言は釈尊の説と云うこと、その証拠いかん。

こた しんごん しやくそん せつ ぼうこく じじよう

答う。もし真言、釈尊の説ならば、亡国は治定なるか。

い こうぼうだいしごぞう た とき ほつけ

もしかなりと云わば、弘法大師五蔵を立つる時、法華を

ろくはらみつきよう ごぞう だいし はんにやはらみつぞう だいご だらにぞう

六波羅蜜經の五蔵の第四の般若波羅蜜蔵、第五の陀羅尼蔵

しんごん こんりゆう たま

をば真言と建立し給えり、いかん。

と しんごんしゆう みけんしんじつ い ゆえ

問う。真言宗を未顕真実とは言うべからず。その故は

しやか せつ ほか こんりゆう ゆえ

釈迦の説の外に建立するが故なり、いかん。

こた　い　しゃくそん　せつきよう　ぼうこく　じじよう
答えて云わく、もし釈尊の説教ならば、亡国は治定な

るか。

いちぎ　い　ろくはらみつきよう　しゃか　せつ　だいにち　せつ
一義に云わく、六波羅蜜経は釈迦の説なるか、大日の説
なるか。もし釈迦の説ならば、末顕真実は治定なるか。

たい　しゃか　と　けんきよう　むやく
他云わく、釈迦の説くところの顕教は無益なりと。

たず　い　ろくはらみつきよう　けんきよう　みつきよう　なか
尋ねて云わく、六波羅蜜経は顕教・密教の中にはいず

れぞや。

たい　ろくはらみつきよう　ぞうぶ　しんごん　わ　け　さんぶ
他云わく、六波羅蜜経は雑部の真言なり。我が家の三部は

じゆんせつ　しんごん
純説の真言なり。

こた じよしよう しょうしよう まった こうぼう しょはん み
答う。助証・正証ということ、全く弘法の所判に見え

ず。もし弘法の義ならば、墮獄は治定なるか。
こうぼう ぎ だごく じじよう

たい しんごん そくしつ おし けんきよう う えりやつこう おし
他云わく、真言は速疾の教え、顕教は迂回歴劫の教え

なり云々。
うんぬん

みずか い じぎ きようもん
自ら云わく、自義なるか、経文なるか。

たい ごひみつきよう い けんきよう しゅぎよう
他云わく、五秘密経に云わく「もし顕教において修行す

もの ひさ さんだいむしゅこう ふ と おの
る者は、久しく三大無数劫を経」と説けり。自ずからその

しょうこ
証拠なり、いかん。

こた きよう しゃか せつ だいにち せつ
答う。さて、この経は釈迦の説なるか、大日の説なるか。

しやか せつ

みけんしんじつ じじよう

もし釈迦の説ならば、末顕眞実は治定なるか。

と ほつけしゅう

きよう よ

ほとけ いんけい そうごう

つく

問う。法華宗はいずれの経に依つて仏の印契・相好を造

けんきよう

な

しんごん

いん

ぬす

おぼ

るや。顕教には無し。ただ真言の印を盗むと覚えたり、い

かん。

こた

ほつけ

ぼう

答う。これによつて法華を謗ずるか。

いちぎ

い

なんじ

ぬす

ぎ そうい

ぼうこく

じじよう

一義に云わく、汝、盗むの義相違せば、亡国は治定な

るか。

いちぎ

い

なんじ

ほつけしゅう

こんりゅう

だいだん

一義に云わく、汝、法華宗の建立するところの大段の

みようほうれんげきよう

ほんぞん

らっこ

と

妙法蓮華経をば本尊と落居して問うか。

いちぎ い しゃくそん さんぶ よ こんりゆう ゆえ

一義に云わく、釈尊を三部に依つて建立する故に、

ろご さんじん くだ い かね なんじ

驢牛の三身と下すか。もしかなりと云わば、返つて汝は

しんごん ひぼう もの せ

真言を誹謗する者なりと責むべし。

いちぎ い さんぜ しょぶつ いんけい そうごう じつ

一義に云わく、三世の諸仏の印契・相好は実に

みようほうれんげきよう よ ぐそく ぎらつこ ぼうこく じじよう

妙法蓮華經に依つて具足するの義落居せば、亡国は治定な

ぬすびと じじよう

るか。また盜人は治定なるか。

いちぎ い りゆうによ りようぜん そくしん いんけい そうごうぐそく

一義に云わく、竜女は靈山に即身に印契・相好具足し

なんぼう じようどう とな しんごん よ こんりゆう

南方に成道を唱えしは、真言に依つて建立するか。もし

い ただ きようもん い せ

しかなりと云わば、直ちに經文を出だせと責むべきなり。

と ぼうこく しやうこ
問う。亡国の証拠、いかん。

こた ほつけ ひぼう ゆえ うんぬん
答う。法華を誹謗する故なり云々。

いちぎ い さんとく しやくそん そむ ゆえ うんぬん
一義に云わく、三徳の釈尊に背く故なり云々。

いちぎ い げんぜあん のん ごしやうぜんしよ みやうほうれんげきやう
一義に云わく、「現世安穩、後生善処」の妙法蓮華經に

そむ たてまつ ゆえ こんじやう ぼうこく ごしやう むけん い
背き奉る故に、今生には亡国、後生には無間と云うなり。

いちぎ い ほけきやうだいさん れつ きやうもん じぎ
一義に云わく、法華經第三の劣とは、經文なるか、自義

なるか。もししからば、亡国は治定なるか。

たい みつきやう たい だいさん れつ
他云わく、密教に対すれば、第三の劣なり。

こた いちぎ い ぎ きやうもん じぎ
答う。一義に云わく、この義、經文なるか、自義なるか。

いちぎ い けんきよう うち ほつけだいいち らっこ

一義に云わく、顕教の内に法華第一なること落居する

い こうぼう ひがごと

けんきよう

か。もししかなりと云わば、さては弘法は僻事なり。顕教

うち

ほつけ

けごん

たい

だいに

しんごん

たい

だいさん

の内にして法華を華嚴に対して第二、真言に対して第三と

い ゆえ

云う故なり。

いちぎ

い

しんごん

たい

だいいち

ぼうこく

じじよう

一義に云わく、真言に対して第一ならば、亡国は治定な

るか。

たい

いん

しんごん

と

ゆえ

だいさん

れつ

い

他云わく、印・真言を説かざるが故に、第三の劣と云う

なり。

こた

ゆえ

れつ

きようもん

じぎ

答う。この故に劣とは、経文なるか、自義なるか。

いちぎ い 一義に云わく、もし法華に説かば、亡国は治定なるか。

たい だい nich しゃか おのおのべつ 他云わく、大日・釈迦 各別なり。

こた いちぎ い 答う。一義に云わく、この故に、法華を謗ずるか。

いちぎ い いちぶつ 一義に云わく、もし一仏ならば、亡国は治定なるか。

いちぎ い おのおのべつ れつ きようもん 一義に云わく、各別なれば劣とは、経文なるか、自義

なるか。

たい けんきよう おうじん みつきよう ほっしん せつ ゆえ 他云わく、顕教は応身、密教は法身の説なり。この故に

ほっけ だいさん れつ 法華は第三の劣なり。

みずか い おうじん せつ ゆえ ほっけ れつ きようもん 自ら云わく、応身の説の故に法華は劣とは、経文なる

か、じぎ自義なるか。

いちぎ い一義に云わく、ほつけ ほっしん せつ法華は法身の説ならば、ぼうこく じじよう亡国は治定な

るか。

いちぎ い一義に云わく、しんごん おうじん せつ真言は応身の説ならば、ぼうこく じじよう亡国は治定な

るか。

たい い ごち ごぶつ とき ほつぽう しゃか ちゅうおう だいにち他云わく、五智・五仏の時は、北方は釈迦、中央は大日

みと見えたり、いかん。

こた いちぎ い ちゅうおう しゃか ぼうこく じじよう答う。一義に云わく、中央は釈迦ならば、亡国は治定な

るか。

いちぎ い ほうぼう しゃか さんぶ うち な
一義に云わく、北方は釈迦ということは、三部の内に無

ふくう ぎ ぶっせつ
し。不空の義なり。仏説にあらず。

たい ほっけ えど せつ しんごん さんがい ほか ほっかいぐう
他云わく、法華は穢土の説なり。真言は三界の外の法界宮

せつ
の説なり。

こた いちぎ い しんごん さんがい うち せつ ぼうこく
答う。一義に云わく、真言は三界の内の説ならば、亡国は

じじよう ぎしゃく もん
治定なるか〈義釈の文〉。

たい けんきよう うち だいにち しゃかい たい と
他云わく、顕教の内にて大日・釈迦一体と説くとも、

みつきよう うち にぶつのおのべつ な おな ぎこと
密教の内にては二仏各別なり。名は同じけれども義異な

るなり、いかん。

こた　　ゆえ　　ぼうごく　　い
答う。この故に亡国と云うなり。

いちぎ　　い
一義に云わく、かくのごとく云うこと、
ただ　　きようもん
直ちに経文を

い
出だすべきなり。

たい　　りゆうによ　　しんごん　　じようぶつ　　ほっけ　　さんみつ　　か
他云わく、竜女は真言の成仏なり。法華には三密闕く

ゆえ
るが故なり。

こた　　じぎ　　きようもん
答う。自義なるか、経文なるか。

たい　　きようもん　　だらに　　え　　ふたいてん　　え
他云わく、経文なり。「陀羅尼を得たり」「不退転を得た

うんぬん　　だらに　　さんみつ　　かじ
り」云々。陀羅尼は三密の加持なり。

こた　　だらに　　しんごん　　い　　じぎ　　きようもん
答う。この陀羅尼を真言と云うは、自義なるか、経文な

るか。

いちぎ

い

こうぼう

ひがごと

ゆえ

一義に云わく、さては弘法は僻事なり。その故は、こ

だらに

けろん

だいさん

れつ

くだ

の陀羅尼を戯論、第三の劣と下すなり。

いちぎ

い

じごそうい

ほつけ

いんあ

ゆえ

一義に云わく、自語相違なり。法華に印有る故なり。

たい

しゅごきよう

もん

よ

しやか

だいにち

さんみつ

他云わく、守護経の文に依れば、釈迦は大日より三密の

ほうもん

なら

じようぶつ

法門を習つて成仏するなり。

こた

ゆえ

ほつけ

ぼう

答う。この故に法華を謗ずるか。

いちぎ

い

もん

さんせつ

うち

そと

一義に云わく、この文は三説の内なるか、外なるか。

いちぎ

い

そうい

ぼうこく

じじよう

一義に云わく、これに相違せば、亡国は治定なるか。

たい ほかきよう がつしよう きようしん ぐそく どう
他云わく、法華經には「合掌し敬心をもつて、具足の道
き ほつ い なん いん しんごん す
を聞きたてまつらんと欲す」と云えり。何ぞ印・真言を捨つ
るや。

こた ゆえ ほつけ ぼう
答う。この故に法華を謗ずるか。

いちぎ い じぎ きようもん
一義に云わく、自義なるか、經文なるか。

いちぎ い ゆえ しんごん す きようもん
一義に云わく、この故に真言を捨てずとは、經文なる

か。

いちぎ い もん しんごん たも い もん
一義に云わく、この文は真言を持つと云う文なるか。

いちぎ もんだん せ
一義に、文段をもつて責むべし。

他云わく、弘法大師を無間と云うは、たい こうぼうだいし むけん い きょうもん 經文なるか、じぎ 自義

なるか。

こた きょうもん
答う。 經文なり。

たい にじゅうはつぽん なか
他云わく、二十八品の中にはいずれぞや。

こた にじゅうはつぽん なか
答う。 二十八品の中に有れば、だごく 墮獄は治定なるか。じじょう

たい
他云わく、しかなり。

こた ほつけ ひぼう じじょう
答う。 法華を誹謗すること治定なるか。 もししからば、

きょうもん
經文を出だして責むべきなり。せ